

バートルの捕虜専用病院に送られ一か月ほど入院したことがあった。その病院の裏の岡の上に墓地があり、多くの捕虜の土饅頭があった。

夏場は少し穴を掘って埋葬できたが、冬は死体に雪を集めて覆ってくるだけだと言っていた。死体は裸にして大腿部にロシア語で名前を書き、冬は丸太のように大八車に乗せて岡に置いてくるだけで、読経も手を合やすことすら許されなかったらしい。私は幸いに、元の工場から連絡があったので缶詰工場に帰ることができた。ちなみに私の就労内容をいうと、電工で電灯（照明灯）の取り付けと配線、電動機の配線と接続（最大七十五馬力で三十五台くらい）変電室の配線と配電盤の配線、電話交換台の接続、そして高圧送電線の架線であった。

このようなことで工場に到着してから工場を離れるまでその期間ちょうど二年で、私たち職場の責任者十数人くらいだけ仕事の引継ぎのため一日だけ残務整理して、そこを去った。

そして、送られてきたときとは逆にチタへはトラッ

クで、それからは貨車でシベリア鉄道を一路走ってナホトカに……。

ナホトカでは第一、第二、第三分所を経て、日本からの迎えの船で函館港に引き揚げた。

シベリア抑留

神奈川県 山口 利一

戦い敗れ関東軍に属した私たちは、やむを得ずソ連軍の捕虜となり、酷寒のシベリアに拉致、飢えと寒さと強制労働を強いられ、四年間屈辱の抑留生活を送った。この間万余の戦友が異国の土と化した。

満州から貨物列車に乗せられ、国境を流れる黒龍江を船で渡り、再び貨物列車に乗せられ一か月余りの旅の果て、着いたところはウランウデという町であった。バイカル湖にほど近く、モンゴル人の多いところであった。広々とした原野にポツンと建つ収容所らしいところに入れられた。周囲を鉄条網と高い板塀で囲み、

要所々々にやぐらが立ち、投光器まで備えられている。

早くもやぐらの上で警備の兵隊が自動小銃を抱いて我々を監視している。しよせん自由を奪われた捕虜は悲しいものだ。人間が人間により動物のごとく扱われる。いつも銃口は我々の方を向いている。生命の保障さえない。彼らの命するままに動くしかない。

所内には木造平屋建ての古いバラックが四棟並んでいた。これが我々の宿舍となるのだ。中に入ると、裸の豆電球のついたうす暗い部屋である。異様な臭いがする。蚕棚式ベットが無造作に並べられている。わら布団等なく板だけだ。仕方なく毛布を敷いて寝たが背中が痛い。あとになっておが屑の入った袋が支給されたので、平たく伸ばして利用した。二か所にベーチカがあったので寒さは防げた。

便所は外である。所内の端に深い穴を掘り、直径三十センチくらいの穴を五十センチ間隔にくり抜いた厚い板を渡しただけのものだ。周囲だけは板で囲ってある。零下何十度もある寒い日に用をなすのは実につらかった。零下の寒さでは排せつ物もすっかり凍り高く

積もる。さながらうんこの柱である。当番制でこれを鉄棒を使い打ち倒す。その際うんこの破片が飛び散り、着ている衣服にも付着する。部屋に戻ると、それが溶け悪臭を放ち往生した。

初めて黒パンを食べた。三食のうち一食はパンだ。目方三百五十グラムというこぶし大のものが支給される。その他大豆、コウリヤン、馬鈴薯等が主食として支給されたが、少量であり到底我々の腹を満たしてくれなかった。黒パンだけはスープ等と一緒に食べると、胃の中で水分を含みふくれ一時満腹感を味わわせてくれた。酸味があり、またばそはそして初めはのどを通らなかった。しかし飢えた口には日を追ってなれ、最後にはケーキでも食べている気分になった。今でも黒パンには愛着を持っている。野菜は塩漬けのキャベツ以外食べたことがない。質量ともに粗悪なもので、とても重労働に耐えられる食事ではなかった。食い物の恨みは恐ろしいとか。

炊事より受領した食事を班別に分配するのには苦労した。四方八方から目が光っており、多少の差にも文

句が飛んでくる。

栄養失調になる者も出てきて次々と死んでいった。死ぬと裸同様にされ埋められてしまう。死者には衣類は要らない。ぼろ服なれど国の財産とか、この国の無慈悲に腹が立つ。

二か月も風呂に入っていない。体がかゆい。シラミがわいてきた。背中をかいいた手を見れば、爪の間にシラミが挟まっている。シャツを脱いで見れば、縫い目にずらり列をなして卵が産みつけられている。血をたらふく吸ってまるまると肥えたシラミがうようよいる。畜生と押しつぶせば、勢いよく吸った血が吹き出る。夜になると南京虫の大群に襲われる。だれもが体の各所にかき傷をつくった。また、寝不足に陥り、ますます体がだるくなる。しばらくして風呂場と滅菌所が設けられたので、これらを撲滅できた。

早速鉄道工場へ働きに行くことになった。過去の経験から仕事を割り当てられた。旋盤等機械を扱う者等いろいろな職種に分かれた。私は雑役として材料運搬や工場内の掃除等をするようになった。鹿児島県出身

の戦友とともに意地悪な職場長にこき使われた。今でも憎たらしい彼の顔は忘れない。ロシア人は個人的にはまことによいが、組織の中では融通がきかずだめである。日本人はロシア人よりはるかに器用である。だから彼らより高いノルマを上げる。

ソ連には仕事量達成の基準を設けたノルマというものがある。高いノルマを達成した者は、労働の英雄として国から表彰される。高いノルマを上げても捕虜の身なればなんのこともない。ノルマを上げればさらに高いノルマを与えられるだけだ。余程要領よくやらないと思わぬわなにはめられバカを見る。

工場内には暖房があり、寒さには耐えることができた。でも、シベリアの寒さのこと、工場内といえど常に零下の寒さである。

いつになっても食糧事情はよくななかった。最後まで飢えに悩まされた。元氣盛りの二十二歳の体であったが、美しいロシア娘を見ても何も感じない。ただ生かされているというような食糧事情だった。

二年も過ぎ長い冬も終わり、川の氷も解け草木の新

芽が出てきた五月初め、待ちに待ったダモイが発表された。幸いに帰国者の仲間に入った。うれしかったが、残された戦友たちの顔を見るのがつらかった。来たときと同様貨物列車に乗せられ、ウランウデを後にした。昭和二十二年五月六日であつたと思う。

シベリア本線を五日余り走り、海の見えるナホトカに着いた。海に向こうは日本である。列車から降りた皆の足取りが軽い。ソ連将校の先導で歩いているが、港より逆の方向に向かっている。おかしいと思つているうちに、とうとう山奥の収容所に入れられてしまった。そして翌日からまたも飢えと寒さと強制労働を強いられ一年半を過ごした。

この間、強烈な民主運動の嵐が吹き荒れた。何事も帰る日までと耐えがたきを忍び、戦友同士励まし合い助け合い、入ソ以来四年間悲惨な抑留生活を生き抜いた。九死に一生を得たとはこのことか。今でも思い出すとぞっとする。

昭和二十四年九月二日舞鶴港に入港。夢にまで見た懐かしい祖国の土を踏んだ。国敗れて山河ありと祖国

の山や河は美しかった。あの感激は生涯忘れることができない。また、今なお異国の地に眠る亡き戦友を思うと、胸が痛む。

満州から強制抑留、そして帰国

新潟県 中沢 仁 作

あの痛ましい第二次大戦終結からはや四十五年は過ぎた。ソ連で強制抑留中死亡した者六万以上、満州でソ連と戦闘で死亡された軍人、民間人は抑留中死亡された者よりはるかに多いと聞く。私たち生きて帰国した人でも、はや死亡者は多く、どうやら生き延びている私たちでも若い人で六十六、七歳、みんな老齢になり、生き延びている者は数が少ない。

私は、昭和十九年四月十日、現役兵として千葉県市川市国府台野戦重砲兵第十七連隊に入隊、同月二十五日渡満、満州国牡丹江省東寧県石門子第一〇一三部隊に転属、ソ満国境の整備につく。五月だというのにま